

合名會社 東洋可鍛鑄工所	出城通六丁目六六八	八二	最高員
伊藤 砒 工 場	南開二丁目四二四	一八〇	同 二〇四ノ處減
合資會社 鈴木製作所	同 六丁目五八一	五三	同 五五ノ處減
大阪鍍金工業株式會社	同 六丁目五八二	四八	同 五八ノ處減
大阪螺旋鍍銀株式會社	中開三丁目五三二	四三	
江本製紙株式會社今宮工場	同 四丁目四九四	四七	同 五七ノ處減
南海鐵道株式會社	南吉田六〇〇ノ一	二七二	
天下茶屋車輛修繕工場	梅通九丁目一、二六五	三〇	
安田 硝 子 製 造 所	梅南通六丁目七六一ノ二	三六	
オリエンタルワニス	北開一丁目四四一ノ一	三三	同 四〇ノ處減
伊藤 硝 子 工 場			

右の指導員は社會課長南雲清次郎と課員宮崎八五郎と之れに當つた。以上の外自轉車工場一ヶ所取調進行中百名以下となり、失格し毛織工場一ヶ所調査開始直前大和に移轉した。

第十三 交 通

交通機關の發達并運輸交通の狀態

大大阪市が我が國の心臟となりて愈々世界的に發達せる今日、大阪市の繁盛地に近く接する今宮町の我が國有數の人口密度を有し大町村となりたるは蓋し必然の勢である。

國道第廿九號道路紀州街道は、町の東に偏して北より入りて南走拾數丁、アスファルト敷きで、路面砥の如く、人車、馬車の往來織るが如く、一等補助道路勝岡街道は、粉濱より來り縦貫すること拾六丁餘で南大阪に達し、二等補助道路阿部野街道、同中道街道、三等補助道路西住吉街道は何れも略々南北の方向に本町を貫通して、主要交通線をなし街路は是等を基幹として東西南北に井通し、交通運輸の便を圖つて居る。鐵道は高野線が町の西南隅を通り、西天下茶屋驛にて附近の乗降に便せる他は、悉く東部に偏して居る、即ち南海線は今宮夷驛を北に天下茶屋驛を南に、萩の茶屋驛を中央にし、最新型の車輛を以て運輸交通を圖り、天下茶屋驛よりは支線を天王寺驛に派して關西線、東海道線と連絡させてゐる。阪堺線は今池驛を以て大阪夷町、堺市、濱寺に通じ、支線を東方平野に出してゐる。

東部の至便なのに反して中央部には一の軌條もなく、不便を極めて居る。大阪市湊町に起れる關西線は、本町の北部を擧して東走し、今宮驛、天王寺驛は區域内ではないが、距離が遠くないから、運輸交通を助ける事が至大である。

人車、馬車、自動車は鐵道と相俟つて利用せられ、晝夜殷賑繁忙を極めつゝあるが、本町は商業地、工業地としてよりは住宅として發達したため生産に見るべきもなく、隨て貨物の出入は比較的尠く、道路狹隘で大型自動車の通行に不十分であり、且つ新開地なる爲、地盤固定せず、雨天には泥濘を没するの難がある。併し是等も都市改正により次第に改善せられ面目の一新せられるのは決して遠くであるまい。

以上は今宮町交通運輸の現況であるが、斯の發達は極めて最近の事に屬し、今日八萬有餘の人口を有して、將に豊崎町を凌駕せんとしてゐるが、此前に行はれた國勢調査には、人口五萬有餘で、十年前の明治四十三年には千六百餘戸人口一萬。明治三十四年四月には戸數漸く二百人口一千餘といふ寥々たる有様であつた。昨年十二月一ヶ月間萩の茶屋驛の乗降客は五十二萬に餘り、十二年前の明治四十二年には一ケ年に今日の四ヶ月分二百二十三萬に過ぎなかつた。天下茶屋驛にては明治四十三年度は一千五百萬を數へたるに九年前の明治三十四年度には漸く二百五十萬人で、約六分の一しかなかつた、以て急激な今日の發展を知るに足るであらう。

史を按ずるに第三紀末葉に於けるブロック運動は、大阪灣なる一大地溝帯を生じ、海波は直ちに和泉山脈なる地壘に逼つたが、其の後幾度の少隆起少沈降を経て、洪積紀を經、近世代に入り、洪積平原は大南海底下に没し、所謂淀川下流の八十八島の時代を作つた。本町の敷地も蒼海の下に没し、潮は今日の聖天山より谷町一帶の丘陵地を洗つたのは、神武帝の御東征の御史實に徴して想像に難くない。其の後淀川木津川の沈積作用を受けて、今日の大阪沖積平野を形成したが、本町は近く洪積層を背後に廻らずにより平野の構成比較的遅々であつたらうし、今日も町名に海濱に因める甲崎、釜ヶ崎、海道端、曳舟等の存して居ることや、朝役の事などから考へても、本町は低濕な海濱の一小漁邑として相當永き時代を經過したものなるべく、其の間大和朝時代に於ける淀川河口船舶の輻湊、平安前期に於ける神崎川の繁盛、御朱印船に於ける堺港の殷賑等はあつたが、殆ど其の影響を蒙らなかつたやうである。織田信長の石山本願寺と構へるや本願寺は木津に築城して堺、淀川の兩港を牽制したことから觀れば、當時本町の敷地は已に悉く構成せられ海岸線は相當遠く距つたが如く、漁邑であつた本町は漸次農村としての色彩を濃厚にしたであらう。降つて徳川時代に入れば、今宮二千四百一十一石は、代官内海氏の治下となつた。併し、人口は依然尠く、生産力消費力の薄弱なる爲め運輸交通極めて振はず、東部には古くより紀州街道ありて住吉、堺港、紀州に通じて車馬の絡繹たるものありしに

反して、本街道を中心として部落、耕地を點綴する小逕の通ぜるに止まつたやうである、當時大阪にはベカ車と稱する兩輪板製の荷物運送車があつたけれども、當町には絶えて之が無かつたか、明細書の如きにも其の事が全く見えない。明治維新後でも三十年前後までは發達極めて遅々であつたが、舊大阪鐵道は二十二年五月に開通を見、十八年には本私設鐵道の嚆矢たる南海線は一部の運轉を開始し、次で和歌山市に延長し、三十三年十月には支線を天王寺驛に出し、或は同じ頃高野鐵道一部の開通をなし、爾後軌道に車輛に改良に改良を重ねて、急激に發達建設せられた所の今宮町の運輸交通を圖りつゝあるのである。

陸路

陸路も本町の發展と共に著しく發達し、道路面積の如きも、大正七年には僅々七千二百四十六坪に過ぎなかつたものが、大正十四年三月現在では、五萬五千九百坪を算するに至り、僅か七ヶ年間に八倍弱の増加を示して居る。是れ全く本町發展の状態を有力に、物語るもの、さうして之れが根幹をなすものは、國道と府道とである。國道は本町の東部を阪堺線と並行して南走し、大阪を起點として本町、住吉、堺を経て和歌山市に達する。所謂紀州街道で、明治維新までは沿道の諸大名、行列を整へ「下へ、下へ」の聲、威々しかつたが、今は其の話も昔語に

聞くだけで、道路も改修され、面目昔日の比ではない。殊に本町を貫通する部分は、現代的科學の產出にかゝはる、最新式方法によりアスファルト敷となり、近代都市の街路と比較するも遜色なきものとなつた、街上を往復するものも亦、昔日の封建的氣分なく、デモクラチックの權化そのままに、自動車、車馬、自轉車等の往來頻繁である。主として堺市以北の各工場の製品、並に野菜等の運搬に使用され、延長八百七十五間、面積三千五百坪を占めてゐる。次に府道は十三間堀川の東岸を南北に通ずるものと、本町の中央部を南北に走るものとの二道あり、主として堺以北の貨物運搬の便に供せられ、國道と相俟つて大阪市南部の三大通路で、其延長二千五百六十三間八九、面積六千七百六十七坪九三。其中、本町の中央部を南北に通ずるものは大阪市の木津に起點を發し、本町を南へ過ぎ、更に玉出町を横ぎり、塚西にて國道に合する。車馬の往來國道に次ぎて繁く、夜間十二時頃より三時頃まで車輪の軋る音を絶つだけである。其の他里道の發達は最近著しく、今や延長二萬三千二百六十九間六に達し、之に要せる土地面積は四萬五千六百七十二坪の多きを占むるに至つた。昔の傳馬若し今日の此状態を見れば驚嘆すること大であらう。實に陸路の發達は著しきものがあるといふべきである。

鐵道

本町住民の交通機關中鐵道としての唯一の誇とするのは、全國私設鐵道中の繁盛に於ける重鎮寧ろ其右に出づるものなきとて敢て恥ぢない所の南海鐵道である。即ち南海本線にては萩の茶屋天下茶屋二驛によつて其便を得、阪堺線にては北天下茶屋今池及霞町の二停留所によつて乗降をなし、高野線にては津守、西天下茶屋停車場によつて、天王寺線にては天下茶屋曳船の二停車場によつて各其の乗降を恣にする。按ずるに明治五年始めて東京横濱間の鐵道が開通され、次いで神戸大阪間に敷設せられて次第に東海道線の幹線を全通するに及んで、明治二十年に至り、政府は時勢の進運に照して私設鐵道條例を發布し、且つ之を獎勵するに及んで、民間に於て私設の勃興を見るに至つた。關東にては東京横濱地方を中心とし、關西にては大阪神戸等中心點となつて各地に敷設せられた。殊に本町は大阪を起點として南方の各地に伸展する咽喉であるから、最も早く最も多く敷設せらるゝに至つた。即ち次の如く現れて敷設せられた。

南海鐵道 舊阪堺鐵道(南海鐵道に合併別載の通り)

舊大阪鐵道(現在の關西本線)

高野鐵道(南海鐵道に合併別載)

阪堺鐵道(南海鐵道に合併別載の通り)

一、舊大阪鐵道

明治二十二年五月十四日當時今宮村の隣村木津村の北隣難波村(今の難波東圓手町湊町驛)を起點として、木津村今宮村を経て東成郡より中河内郡を貫通して奈良縣櫻井に達する二十九哩を本線とし、且つ王寺より奈良に支線を、東成郡天王寺村より城東に(今の城東線)支線を發する計畫にて、明治二十一年三月に許可を得て工事著手、土地買収等開始に當つて行きなやみを生じたが、大阪柏原間を二十二年五月十四日開通し、漸次開通して三十四年四月一日關西鐵道株式會社となり、四十年十月一日帝國鐵道廳によつて關西本線となつた。併し三十年四月接續町村の大阪市編入せられ所謂管轄の變更で線路によつて市域と本町との境界を明にされ、今宮驛も市内にあれば、爾餘の事どもは掲ぐるを避けた。

二、南海鐵道

本線 大阪市より本町勝間粉濱村を點綴して東成郡より和泉の沿海を走り、紀伊國境なる孝子山脚より和歌山に達する延長四拾餘哩の大阪堺間及紀泉開通のため明治二十六年十一月四日發起人創立委員會を開き二十八年五月十日紀阪鐵道(當時計畫中)と合併して紀攝鐵道と改め、再び種々の事情により南陽鐵道と改め、漸く二十八年八月二十五日堺大阪間開通した。

爾來幾多の工事追加他線買収合併電車運輸まで次の通りである。

(一) 工事追竣工

(イ) 明治二十八年八月二十五日 大阪堺間開通

(ロ) 同 三十年十月一日 堺佐野間開通

(ハ) 同 十一月九日 佐野尾崎間開通

(ニ) 同 三十一年十月二十二日 尾崎和歌山北口間開通

(ホ) 同 三十三年十月二十六日 天下茶屋天王寺間開通

(ヘ) 同 三十六年三月二十一日 和歌山北口和歌山市間開通

(二) 他線買収

(イ) 舊阪堺線買収 舊阪堺線は明治十五年藤田傳三郎氏外八名發起となり大阪難波新地より天下茶屋住吉を経て堺に至る六哩餘の狹軌鐵道(二呎九吋)にて阪堺間の交通を計畫し十七年六月十六日認可を得十八年二月著工十二月二日難波大和川間竣工五月十日運輸開始して後二十九年九月三十日百萬圓にて南海鐵道に買収された。買収後狹軌を三呎六吋に改軌した。

(ロ) 後の阪堺線買収 後の阪堺線は資本金三百萬圓を以つて阿部彦太郎外二十三名發

起となり次の如く開通せるを大正四年六月二十二日買収した。

第一期—大阪惠美須町—堺大小路間

明治四十四年十一月二十五日竣工 同十二月一日運輸

第二期—堺大小路—少林寺間(今御陵前)

明治四十五年二月二十四日竣工 同三月五日運輸

第三期—堺少林寺—濱寺間

同 四十五年三月廿五日竣工
同 四月一日運輸
堺宿院—大濱間 大正元年七月十八日竣工
同 八月廿六日運輸

第四期—本町今池—平野郷間支線

大正三年四月十八日竣工 同四月二十六日運輸

(ハ) 明治四十二年七月二十一日浪速軌道を買収し同四十三年十月一日上町線電車運輸す。

浪速軌道は土居通夫社長となり天王寺住吉間大阪馬車鐵道會社が前身である。

(ニ) 高野電車線買収

大正十一年九月十九日合併高野鐵道株式會社は明治二十九年二月一日創立堺狭山間狭山長野間を開通せんとし更に大阪堺間、長野より高野山麓に伸展せんと計畫し三十

一年一月堺狭山間同年三月狭山長野間を開通三十三年八月堺汐見橋間開通四十年九月二十一日高野登山鐵道と改名、大正四年一月長野三日市間開通四年三月橋本間開通四年四月三十日大阪高野電車と改名し前記十一年九月十九日南海鐵道と合併す合併後橋本九度山間開通し堺大阪間の一部單線を複線になしなほ九度山より難波直通電車發車の計畫すでに成らんとして連絡點岸の里の驛模様かへをした。

(三) 電車運轉 明治二十八年八月二十五日開設爾來難波和歌山間全通即ち明治三十六年三月二十一日まで鐵道運轉で電車運轉全通せしは次の通りである。

- 明治四十年八月二十一日 難波濱寺間
- 明治四十年十一月十一日 天下茶屋天王寺間
- 明治四十三年十月一日 上町線
- 明治四十四年四月十五日 濱寺葛葉間
- 同 七月一日 葛葉大津間
- 同 九月一日 大津貝塚間
- 同 十一月二十一日 貝塚和歌山間
- 大正二年七月十一日 上町線住吉交叉點住吉公園間

叙上の通り、大阪を中心として以南各地に鐵道網をなす南海鐵道が本町に交通至便を與ふ電車運轉貨物車運轉及乗降人員等を見るに最近著しく繁多をきはめて、概略左の如き數を調査によつて示してゐる。殊に本線萩の茶屋、天下茶屋驛の乗降客の夥多、阪堺線今池北天下茶屋停留所よりの乗客定期乗降客の頻繁は著しい。尙近來高野線西天下茶屋停車場は附近の發展と共に激烈なる増客である。

(一) 本線萩の茶屋天下茶屋驛の電車停車回數一日に(大正十四年二月末日現在)
電車 二百三十四往復(定期)

臨時増發 玉出住吉折返し三十往復内外

天下茶屋驛より天王寺驛へ

電車 五十往復

(二) 阪堺線今池停留所及北天下茶屋停留所にては

五百五十往復 今池

三百八十往復 北天下茶屋(今池より平野行百七十往復を除くため)

(三) 高野線西天下茶屋停車場

五十五往復

(四) 貨車運轉

天下茶屋驛 二十二往復 (本線)

十二往復 (天王寺驛へ)

西天下茶屋驛 七往復 (高野線)

(五) 電車乗降人員 大正十三年十二月中一ヶ月の數調査

萩の茶屋 乗客二十五萬八千三百五十四人

天下茶屋 降客二十七萬七千六百九十八人

降客十二萬八千五百六十八人

降客十萬四千四百九十三人

西天下茶屋 降客五萬二千六百六十八人

降客五萬二千六百六十三人

阪堺線の乗降については其調査困難にて只惠美須町にて一日平均四萬人の乗降を算して今池北天下茶屋停留所より乗降するも詳細に調査する能はずとも近時朝夕の乗降著しく増加し來るは明である。

諸 車

本町に於ける諸車は之を種類別より見れば、自動車、自動自転車、自轉車、人力車、荷馬車、荷車で其の輛數は左の如くである。

自動車一。自動自転車七。

自轉車三四八〇。人力車(家用一六
營業用三五)

荷馬車 一七八。荷車(大一一二〇
小一七七三)

水 路

水路は現在に於ては見るべきものがない。唯本町の西境に十三間堀川あるだけである。延長八百十間。元來本川は人の手で成つた運河で、大阪の南西部木津川より分れ、南へ流れ大和川の下流に連る。昔は幅員も名に違はず廣かつたが、何時とはなく狭められ、現在では、廣き所も七八間を出でざる程度のものである。加ふるに平日は水量少く、小船さへ通り難い。唯滿潮及び大水の時を利用して、木津川、大和川より土砂石炭等の運搬をなすに過ぎない。時には小筏の浮ぶこともあるにはあるが稀である。其の他大流川、ながし川等の如き小川、寧ろ溝渠の

存在するも水運の用に供する程のもでない。是等の川は昔から、今日の如き整然たるものではなく、極めて不整形の而も屈曲してゐたものが、人工の加へられて、現今の如く直線形のものとなつたのである。主として排水の用をなす外下流に小船の浮ぶにとゞまる。かゝる状態にあるが故に、本町の船舶方面は記すべきことがない。唯大昔漁村なりし時代は、水運の便も多かつたことは、今も曳船の如き地名の残され居るのを見て想像せられるのである。

第十四 通信機關

上古のことは知らず、通信事業の起源が神武天皇橿原奠都後間もない時代に在ることや、應神天皇難波奠都と共に大阪が通信の中樞であつたことや、又後年に至り驛令驛符の制度が定められたことや、遙かに下つては徳川氏時代に、飛脚制のあつたことなどは本邦の一般的通信機關の歴史であるから且らく之を措き、茲には明治政府以來、文書に明な所の吾が今宮町の通信機關に就て記述しよう。

天下茶屋郵便局以前

明治四年郵電制度が確立せられ、同年正月二十四日驛遞大阪郵便を大阪市中島淀屋橋角に設置された。吾が今宮町の通信も此處で取扱はれてゐたのである。同年五月二十二日に東區高麗橋三十番地に移轉し、同年八月十四日驛遞司を廢し、驛遞寮を大藏省に置かれたので、驛遞寮大阪出張所と改稱せられ、同八年五月二十四日、驛遞寮出張大阪郵便局と改稱した。さうして同九年驛遞寮高津分局を置かれるに及び吾が今宮町の郵便物集配事務も亦、同局に於て取扱はれたのであつた。爾來幾多の變遷を経て、明治三十五年十一月一日、大阪郵便電信局難波支

局を設置し、同局をして之れを取扱はしめられたが、明治四十四年三月二十六日以降、再び高津郵便局所管に組替せられ、其處で當町の通信を管轄してゐたのである。明治四十年三月十六日大阪府東成郡天王寺村大字天王寺七一〇番地に初めて天下茶屋郵便局と稱する無集配三等局を設置し、爲替貯金の受拂郵便物の交付事務を取扱はしめ、郵便物集配事務は依然として高津局に於て取扱をしてゐたが、今宮が著しき發展をなし、痛切に集配局の必要を來したので、明治四十五年五月六日、東成郡天王寺村字與吉ヶ芝に局舎を新築移轉すると同時に、特定三等郵便局に昇格、郵便發信事務の一切をあげてその所管とすると共に、電話交換事務を併せ取扱ふことゝなつた。後大正八年九月二十六日二等郵便局に昇格し、茲に於て純然たる官廳組織をなし、今日に至つたのである。其概要を表示しよう。

位 置

等 級

設 置 月 日

- 大阪府東成郡 天王寺村札の辻七一〇 三等(無集配) 明治四十年三月十六日
- 大阪府東成郡 天王寺村與吉ヶ芝四八八 三等(特 定) 明治四十五年五月六日改築移轉
- 大阪府東成郡 天王寺村與吉ヶ芝四八八 二 等 大正八年九月二十六日
- 大阪府東成郡 天王寺村月夜 二 等 大正十三年十二月十六日改築移轉

尙ほ天下茶屋郵便局取扱事務は特種通常郵便物、小包郵便物、爲替貯金、年金恩給、公衆電

話受付。市公金取扱事務。電信和文發信發著。電信歐文發信發著。集金郵便引受。普通通常郵便引受配達。特種通常郵便引受配達。小包郵便配達。集金郵便取立。電話交換事務。國庫金取扱。簡易生命保險取扱等である。

今宮町に於ける郵便貯金爲替及保險電話統計表

年 度	郵便貯金		爲		替		保 險	
	新規預入 人 員	預入度數預入金額 拂戻度數拂戻金額 振出口數振出金額	振出口數 振渡口數	振出金額 拂渡金額	加入者數	加入者數	加入者數	加入者數
元 年	三三	三、九三三	一七三	三九、一七八	二四〇	一七、三三	三六七	三、六三
一 年	四四	三、九九九	二〇七	四九、六〇七	二四六	一八、九三	二九三	三、七〇
二 年	四四	三、九九九	二五〇	四七、八九〇	二四七	二〇、〇八	三三七	三、八二
三 年	五七	四、四九四	三五一	四七、七四一	二八四	二五、九六	四〇九	四、五八
四 年	六八	六、四九四	四三七	五〇、〇〇八	四〇九	三八、八五	四九六	五、八三
五 年	九〇	九、七四五	五三七	五九、〇〇八	四八八	五九、九二	五七	五、七
六 年	一三六	一一、八六三	六五三	七〇、八六八	五八六	六八、八二	六三	六、三
七 年	一三三	一二、四三三	七〇九	七〇、三三四	六〇六	七〇、四二	六三	六、三
八 年	一三七	一二、一五九	七〇三	七〇、五三三	六〇六	七〇、四二	六三	六、三
九 年	一四四	一六、一四七	七二四	八〇、九七〇	七〇九	七九、〇七三	七〇	七、〇
十 年	一六八	一六、三三六	七三〇	八〇、七三三	七〇九	七九、〇七三	七〇	七、〇
十 一 年	一八五	一八、九四四	七三三	八〇、〇〇六	七〇九	七九、〇七三	七〇	七、〇
十 二 年	一四〇	一八、七八四	七二八	七九、六二二	七〇三	七九、〇七三	七〇	七、〇

備考 電話加入者數は極めて少数なるは大體に於て今宮町長橋迎を以て大阪と電話加入區域を區劃しあるに依る

右の外に無集配三等局として郵便爲替、小包、貯金、簡易保険を取扱ふものに左の數局がある。

- (一) 萩の茶屋郵便局 大正元年八月十一日設置、現所在今宮町西萩の茶屋三八二番地
 - (二) 飛田郵便局 大正十年一月開設
 - (三) 津守郵便局 大正十一年一月十六日開局、現所在西成郡津守村四四九ノ一番地
- 此他電車便集配柱函が南海本線の萩の茶屋驛構内、天下茶屋構内、阪堺線の今池停留場構内とに在る。又公衆電報取扱所としては南海線天下茶屋驛に在るのである。

郵便貯金

郵便貯金は其地方興廢の反映である。併し今宮村當時の事に就ては十分明確なる調査を爲す事を得ないが、明治三十五年頃よりの概況を調査するに左記の如き概數を得た、之れに依つて本町郵便貯金發達状態を窺ふ事が出来る。

左記 (各年度末現在高)

年次	人員	金額
明治三十五年	六九六	五、〇四七

明治三十六年	七三六	四、七八六
同 三十七年	八九七	七、六〇一
同 三十八年	一、〇七二	一一、五一九
同 三十九年	一、五六五	一九、七六四
同 四十年	一、七六六	二八、五九三
同 四十一年	一、九三二	二九、六七三
同 四十二年	二、一二八	四〇、〇五三
同 四十三年	二、四三八	四八、二四九
同 四十四年	二、七四六	五八、四八七
大正元年	二、九二八	五五、一〇六
同 二年	三、三四八	五八、七七一
同 三年	三、七七八	七二、〇〇一
同 四年	四、七二一	一〇七、〇九二
同 五年	六、三〇五	一九八、三九五
同 六年	七、七七二	二九九、七三七
同 七年	八、五六六	三五七、五四四
同 八年	九、五二四	四一四、七九八
同 九年	一〇、二一三	五五一、〇三一
同 十年	一〇、四七六	五八〇、一九九

同	十一年	一〇、三二八	六九二、九三〇
同	十二年	一〇、三四七	六四〇、五九四
同	十四年一月末	一〇、三四四	五六〇、四五〇

簡易保険

官營としての簡易保険事業が創始されたのは大正五年十月一日からのことである。當時本町にあつては天下茶屋郵便局、萩ノ茶屋郵便局の二局に於て取扱はれてゐた。其後大正十年飛田郵便局大正十一年津守郵便局の二局新設せられて爾來この四局にて扱はれ現在に至つたのである。左に概表を示さう。

年	局名	天下茶屋局		萩ノ茶屋局		飛田局		津守局		合	
		加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額
大正五年	六	九、三五〇	二四、五〇〇	三、四〇〇	八、四〇〇					九、三五〇	二四、五〇〇
同六年	一〇	一六、三〇〇	三、四〇〇	五、八三三	一四、七〇〇					一六、三〇〇	三、四〇〇
同七年	二七〇	三八、二〇〇	二二、五〇〇	一九、三三三	二九、九〇〇					三八、二〇〇	二二、五〇〇
同八年	四七八	五七、八〇〇	三、八、五〇〇	一四、二、三三三	三五、二〇〇					五七、八〇〇	三、八、五〇〇
同九年	二、六〇〇	一、三、四〇〇	四、三、〇〇〇	三、四、九六六	三、八、五〇〇					一、三、四〇〇	四、三、〇〇〇
計		九三、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	二四、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇					九三、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇

年	局名	天下茶屋局		萩ノ茶屋局		飛田局		津守局		合	
		加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額
同十年	二、六〇〇	四、七、八〇〇	三、三、二〇〇	一〇、四、六三三	六、七、三〇〇					四、七、八〇〇	三、三、二〇〇
同十一年	五、四四五	八、六、〇〇〇	四、〇、六八〇	八、九、七〇〇	九、五、〇〇〇					八、六、〇〇〇	四、〇、六八〇
同十二年	六、五〇〇	一、三、五、一八〇	六、四、四三、八	二、五、二、六七〇	九、六、八〇〇					一、三、五、一八〇	六、四、四三、八
計		一、四、八、七四五	一、〇〇、〇〇〇	二、四、〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇					一、四、八、七四五	一、〇〇、〇〇〇

第十五 警備機關

今宮町の消防機關は、他の各町村の其れと同じく、大阪府警察部の管理に屬し、府令によりて組織されたもので、其の組織年月は明治四十四年七月二十六日である。組織當時は小頭以下四名の少數に過ぎなかつたが現今は多數となり、機關も亦大いに充實して居る、其組織は常備員として組頭八名。小頭甲乙各一名。消防係八名。機關係二名。汽鑪係二名に豫備員二十四名であつて、其所有する機具は旗二個。高張二個。弓張十個。唧筒、蒸汽自動車各一個。腕用唧筒及附屬品二個。輜重車一個。梯子一個。鳶口七個。喇叭三個。ホース三十本である。

大正十三年度豫算は

豫算總額 一七、〇一四圓

内 譯

給 料 九、九〇〇圓
 雜 給 二、一六圓
 需用費 四、九八八圓

であつて、給與の狀況は常備組頭七十三圓、小頭六十七圓、消防手四十九圓より五十六圓まで

である。又非常出動の場合は常備員一圓豫備員一圓五十錢と定められてゐる。

尚主要機械の内容を示せば左の如くである。

名 稱	幅長	馬力	放水量	購年 月入	價 格
唧筒自動車	長十七尺 幅五尺七寸	二二	七五	大正七年十二月	三、二五〇圓
蒸汽唧筒	長十尺 幅五尺	一六	二五	大正十年三月	五、〇〇〇圓
腕用唧筒	一號	二箇			
ホース	三十本(三吋五十尺物)				

第十六 兵 事

三四二

在郷軍人會今宮分會

帝國在郷軍人會今宮町分會は、明治四十五年四月に創設せられた。當時は會員數も五十名内外で従つて役員も亦數名を出でない誠に微々たる一分會として呱呱の聲を擧げたのであるが、創立後僅々十四年なるに、今日では名譽會員百餘名、會員數二千三百六十名を算し役員も又五十九名を有するの盛況を呈するに至つた。此の十四年間數代の分會長を経て當町が短年月の間に急激な發展と共に本邦第一の大町と化したに正比例して、當分會も異常な急速力で擴大せられ、鞏固な基礎の上に強大な勢力を有する異數の團體が構成せられた事は、殆んど他に其類例を見ないのである。此の無比の發展振りを示した我國有數の本分會も終に西成郡が大阪市域編入の爲めに併合せられたのである。茲に聊か過去現在の概況を略述しよう。

一、現在の組織

大正十一年十月秋期總會で豫備陸軍一等軍醫吉田繁治郎氏が分會長に就任すると同時に副長二名で分會長を補佐し、幹事長一名幹事六名理事三名會計一名で共に内務の處理に當り其他に

班長十三名組長三十三名で班及組の處理に任じた。分會を十三ヶ班二十六組制度として一ヶ班に約二百名内外の會員を抱有するの組織である、尙財政の方は基本金壹千五百圓を有し町よりは毎年補助金年額金參百圓を受けて年中行事の諸費用に充ててゐる（因に本分會正會員からは會費を徴收しない定めである）

二、現行の事業

事業は之を二分して年中既定事業と豫定事業の二部制度としてある。

既定行事

入隊除隊兵の送迎、現役軍人の慰問、三大節拜賀式舉行、壯丁及點呼の豫習、招魂祭及春秋總會、耐熱及耐寒行軍、記念日祝典。

豫定行事

通俗及軍事講演會、壯丁豫備檢診及徴兵検査立會、春秋武術競技會、及一般運動競技會支部及聯合競技參加、夏期及冬期會員訪問、分會報發行。

右の外火災其他天災地變の突發的事變に際しては會員出動して機宜の措置に任じ又名譽會員及一般會員の慶弔には代表者が訪問するの定めである。

一年一月堺狭山間同年三月狭山長野間を開通三十三年八月堺汐見橋間開通四十年九月二十一日高野登山鐵道と改名、大正四年一月長野三日市間開通四年三月橋本間開通四年四月三十日大阪高野電車と改名し前記十一年九月十九日南海鐵道と合併す合併後橋本九度山間開通し堺大阪間の一部單線を複線になしなほ九度山より難波直通電車發車の計畫すでに成らんとして連絡點岸の里の驛模様かへをした。

(三) 電車運轉 明治二十八年八月二十五日開設爾來難波和歌山間全通即ち明治三十六年三月二十一日まで鐵道運轉で電車運轉全通せしは次の通りである。

- 明治四十年八月二十一日 難波濱寺間
- 明治四十年十一月十一日 天下茶屋天王寺間
- 明治四十三年十月一日 上町線
- 明治四十四年四月十五日 濱寺葛葉間
- 同 七月一日 葛葉大津間
- 同 九月一日 大津貝塚間
- 同 十一月二十一日 貝塚和歌山間
- 大正二年七月十一日 上町線住吉交叉點住吉公園間

叙上の通り、大阪を中心として以南各地に鐵道網をなす南海鐵道が本町に交通至便を與ふ電車運轉貨物車運轉及乗降人員等を見るに最近著しく繁多をきはめて、概略左の如き數を調査によつて示してゐる。殊に本線萩の茶屋、天下茶屋驛の乗降客の夥多、阪堺線今池北天下茶屋停留所よりの乗客定期乗降客の頻繁は著しい。尙近來高野線西天下茶屋停車場は附近の發展と共に激烈なる増客である。

(一) 本線萩の茶屋天下茶屋驛の電車停車回数一日に(大正十四年二月末日現在)
電車 二百三十四往復(定期)

臨時増發 玉出住吉折返し三十往復内外

天下茶屋驛より天王寺驛へ

電車 五十往復

(二) 阪堺線今池停留所及北天下茶屋停留所にては

五百五十往復 今池

三百八十往復 北天下茶屋(今池より平野行百七十往復を除くため)

(三) 高野線西天下茶屋停車場

五十五往復

(四) 貨車運轉

天下茶屋驛 二十二往復 (本線)

十二往復 (天王寺驛へ)

西天下茶屋驛 七往復 (高野線)

(五) 電車乗降人員 大正十三年十二月中一ヶ月の數調査

萩の茶屋 乗客二十五萬八千三百五十四人

天下茶屋 降客二十七萬七千六百九十八人

降客十二萬八千五百六十八人

降客十萬四千四百九十三人

西天下茶屋 降客五萬二千六百六十八人

降客五萬二千六百六十八人

阪堺線の乗降については其調査困難にて只惠美須町にて一日平均四萬人の乗降を算して今池北天下茶屋停留所より乗降するも詳細に調査する能はずとも近時朝夕の乗降著しく増加し來るは明である。

諸 車

本町に於ける諸車は之を種類別より見れば、自動車、自動自転車、自轉車、人力車、荷馬車、荷車で其の輻數は左の如くである。

自動車一一。自動自転車七。

自轉車三四八〇。人力車(家用一五六
營業用三五)

荷馬車 一七八。荷 車(大一一二〇
小一七七三)

水 路

水路は現在に於ては見るべきものがない。唯本町の西境に十三間堀川あるだけである。延長八百十間。元來本川は人の手で成つた運河で、大阪の南西部木津川より分れ、南へ流れ大和川の下流に連る。昔は幅員も名に違はず廣かつたが、何時とはなく狭められ、現在では、廣き所も七八間を出でざる程度のものである。加ふるに平日は水量少く、小船さへ通り難い。唯滿潮及び大水の時を利用して、木津川、大和川より土砂石炭等の運搬をなすに過ぎない。時には小筏の浮ぶこともあるにはあるが稀である。其の他大流川、ながし川等の如き小川、寧ろ溝渠の

存在するも水運の用に供する程のもでない。是等の川は昔から、今日の如き整然たるものではなく、極めて不整形の而も屈曲してゐたものが、人工の加へられて、現今の如く直線形のものとなつたのである。主として排水の用をなす外下流に小船の浮ぶにとゞまる。かゝる状態にあるが故に、本町の船舶方面は記すべきことがない。唯大昔漁村なりし時代は、水運の便も多かつたことは、今も曳船の如き地名の残され居るのを見て想像せられるのである。

第十四 通信機關

上古のことは知らず、通信事業の起源が神武天皇橿原奠都後間もない時代に在ることや、應神天皇難波奠都と共に大阪が通信の中樞であつたことや、又後年に至り驛令驛符の制度が定められたことや、蓋かに下つては徳川氏時代に、飛脚制のあつたことなどは本邦の一般的通信機關の歴史であるから且らく之を措き、茲には明治政府以來、文書に明な所の吾が今宮町の通信機關に就て記述しよう。

天下茶屋郵便局以前

明治四年郵電制度が確立せられ、同年正月二十四日驛遞大阪郵便を大阪市中島淀屋橋角に設置された。吾が今宮町の通信も此處で取扱はれてゐたのである。同年五月二十二日に東區高麗橋三十番地に移轉し、同年八月十四日驛遞司を廢し、驛遞寮を大藏省に置かれたので、驛遞寮大阪出張所と改稱せられ、同八年五月二十四日、驛遞寮出張大阪郵便局と改稱した。さうして同九年驛遞寮高津分局を置かれるに及び吾が今宮町の郵便物集配事務も亦、同局に於て取扱はれたのであつた。爾來幾多の變遷を経て、明治三十五年十一月一日、大阪郵便電信局難波支

局を設置し、同局をして之れを取扱はしめられたが、明治四十四年三月二十六日以降、再び高津郵便局所管に組替せられ、其處で當町の通信を管轄してゐたのである。明治四十年三月十六日大阪府東成郡天王寺村大字天王寺七一〇番地に初めて天下茶屋郵便局と稱する無集配三等局を設置し、爲替貯金の受拂郵便物の交付事務を取扱はしめ、郵便物集配事務は依然として高津局に於て取扱をしてゐたが、今宮が著しき發展をなし、痛切に集配局の必要を來したので、明治四十五年五月六日、東成郡天王寺村字與吉ヶ芝に局舎を新築移轉すると同時に、特定三等郵便局に昇格、郵便發信事務の一切をあげてその所管とすると共に、電話交換事務を併せ取扱ふことゝなつた。後大正八年九月二十六日二等郵便局に昇格し、茲に於て純然たる官廳組織をなし、今日に至つたのである。其概要を表示しよう。

位 置 等 級 設 置 月 日

- 大阪府東成郡 天王寺村札の辻七一〇 三等(無集配) 明治四十年三月十六日
- 大阪府東成郡 天王寺村與吉ヶ芝四八八 三等(特 定) 明治四十五年五月六日改築移轉
- 大阪府東成郡 天王寺村與吉ヶ芝四八八 二 等 大正八年九月二十六日
- 大阪府東成郡 天王寺村月夜 二 等 大正十三年十二月十六日改築移轉

尙ほ天下茶屋郵便局取扱事務は特種通常郵便物、小包郵便物、爲替貯金、年金恩給、公衆電

話受付。市公金取扱事務。電信和文發信發著。電信歐文發信發著。集金郵便引受。普通通常郵便引受配達。特種通常郵便引受配達。小包郵便配達。集金郵便取立。電話交換事務。國庫金取扱。簡易生命保險取扱等である。

今宮町に於ける郵便貯金爲替及保險電話統計表

年 度	郵便貯金		爲		替		保 險	
	新規預入 人 員	預入度數預入金額 拂戻度數拂戻金額 振出口數振出金額 拂渡口數拂渡金額	加入者數	加入者數	加入者數	加入者數	加入者數	加入者數
元 年	三三	三、九三三	一七三	三九、一七八	二四二〇	一七、三三	三六七	三、六三
一 年	四四	三、九九九	二〇七	四三、六〇七	二四六一	一八、九三	二九三	三、七〇
二 年	四四	三、九九九	二五〇	四七、八九〇	二四七〇	二〇、〇六	三三七	三、八二
三 年	五七	四、四九四	二五五	四七、七四一	二四九〇	二〇、九六	三三七	四、五八
四 年	六八	六、四九四	三五一	六七、七四一	二八四	二五、九六	四〇九	五、八三
五 年	九〇	九、七四五	四三七	一〇〇、〇〇八	四〇九五	三八、八五	四九六	五、八三
六 年	一三六	一一、八三三	五三三	一〇一、八六八	五八六六	五九、八六	四八八	六、九二
七 年	一三三	一二、四三三	七〇九	一二〇、三三四	六六六二	九〇、四二	六四〇	七、六六
八 年	一三七	一四、一五九	七〇三	一三〇、五三三	七六三三	一〇五、七九	七三三	八、四八
九 年	一四四	一六、一四七	七二四	一三二、九四〇	八〇九七	一〇九、七三	七三〇	九、九二
十 年	一六八	一六、三三六	七三〇	一三六、七三三	七八四一	一一六、六三	七三〇	一〇、九二
十 一 年	一八五	一八、九四四	七三三	一四〇、〇〇六	七八九三	一二三、八二	七三〇	一二、〇七
十 二 年	一四〇	一八、七八四	七二八	一三九、六二二	七三三三	一二七、五二	七三〇	一二、〇七

備考 電話加入者數は極めて少数なるは大體に於て今宮町長橋迎を以て大阪と電話加入區域を區劃しあるに依る

右の外に無集配三等局として郵便爲替、小包、貯金、簡易保険を取扱ふものに左の數局がある。

- (一) 萩の茶屋郵便局 大正元年八月十一日設置、現所在今宮町西萩の茶屋三八二番地
 - (二) 飛田郵便局 大正十年一月開設
 - (三) 津守郵便局 大正十一年一月十六日開局、現所在西成郡津守村四四九ノ一番地
- 此他電車便集配柱函が南海本線の萩の茶屋驛構内、天下茶屋構内、阪堺線の今池停留場構内とに在る。又公衆電報取扱所としては南海線天下茶屋驛に在るのである。

郵便貯金

郵便貯金は其地方興廢の反映である。併し今宮村當時の事に就ては十分明確なる調査を爲す事を得ないが、明治三十五年頃よりの概況を調査するに左記の如き概數を得た、之れに依つて本町郵便貯金發達状態を窺ふ事が出来る。

左記

(各年度末現在高)

年次	人員	金額
明治三十五年	六九六	五、〇四七

通信機關

明治三十六年	七三六	四、七八六
同 三十七年	八九七	七、六〇一
同 三十八年	一、〇七二	一一、五一九
同 三十九年	一、五六五	一九、七六四
同 四十年	一、七六六	二八、五九三
同 四十一年	一、九三二	二九、六七三
同 四十二年	二、一二八	四〇、〇五三
同 四十三年	二、四三八	四八、二四九
同 四十四年	二、七四六	五八、四八七
大正元年	二、九二八	五五、一〇六
同 二年	三、三四八	五八、七七一
同 三年	三、七七八	七二、〇〇一
同 四年	四、七二一	一〇七、〇九二
同 五年	六、三〇五	一九八、三九五
同 六年	七、七七二	二九九、七三七
同 七年	八、五六六	三五七、五四四
同 八年	九、五二四	四一四、七九八
同 九年	一〇、二一三	五五一、〇三一
同 十年	一〇、四七六	五八〇、一九九

同	十一年	一〇、三二八	六九二、九三〇
同	十二年	一〇、三四七	六四〇、五九四
同	十四年一月末	一〇、三四四	五六〇、四五〇

簡易保険

官營としての簡易保険事業が創始されたのは大正五年十月一日からのことである。當時本町にあつては天下茶屋郵便局、萩ノ茶屋郵便局の二局に於て取扱はれてゐた。其後大正十年飛田郵便局大正十一年津守郵便局の二局新設せられて爾來この四局にて扱はれ現在に至つたのである。左に概表を示さう。

年	局名	天下茶屋局		萩ノ茶屋局		飛田局		津守局		合	
		加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額
大正五年	六	九、三五〇	二四、五〇〇	三、四〇〇	八、四〇〇					九、三五〇	二四、五〇〇
同六年	一〇	一六、三〇〇	三、四〇〇	五、八三三	一四、七〇〇					一六、三〇〇	三、四〇〇
同七年	二七〇	三八、二〇〇	二二、五〇〇	一九、三三三	二九、九〇〇					三八、二〇〇	二二、五〇〇
同八年	四七八	五七、八〇〇	三、八、五〇〇	一四、二、三三三	三五、二〇〇					五七、八〇〇	三、八、五〇〇
同九年	二、六〇〇	一、三、四〇〇	四、三、〇〇〇	三、四、九六六	三、八、五〇〇					一、三、四〇〇	四、三、〇〇〇
計		九三、三〇〇	一、〇〇、〇〇〇	二四、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇					九三、三〇〇	一、〇〇、〇〇〇

年	局名	天下茶屋局		萩ノ茶屋局		飛田局		津守局		合	
		加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額	加入口数	契約金額
同十年	二、六〇〇	四、七、八〇〇	三、三、二〇〇	一〇、四、六三三	六、七、三〇〇					四、七、八〇〇	三、三、二〇〇
同十一年	五、四四五	八、六、〇〇〇	四、〇、六八〇	八、九、七〇〇	九、五、〇〇〇					八、六、〇〇〇	四、〇、六八〇
同十二年	六、五〇〇	一、三、五、一八〇	六、四、四三、八	二、五、二、六七〇	九、六、八〇〇					一、三、五、一八〇	六、四、四三、八
計		一、四、八、七四五	一、〇〇、〇〇〇	二、四、〇、九三三	二、四、〇、九三三					一、四、八、七四五	一、〇〇、〇〇〇

第十五 警備機關

今宮町の消防機關は、他の各町村の其れと同じく、大阪府警察部の管理に屬し、府令によりて組織されたもので、其の組織年月は明治四十四年七月二十六日である。組織當時は小頭以下四名の少數に過ぎなかつたが現今は多數となり、機關も亦大いに充實して居る、其組織は常備員として組頭八名。小頭甲乙各一名。消防係八名。機關係二名。汽鑪係二名に豫備員二十四名であつて、其所有する機具は旗二個。高張二個。弓張十個。唧筒、蒸汽自動車各一個。腕用唧筒及附屬品二個。輜重車一個。梯子一個。鳶口七個。喇叭三個。ホース三十本である。

大正十三年度豫算は

豫算總額 一七、〇一四圓

内 譯

給 料 九、九〇〇圓
 雜 給 二、一六圓
 需用費 四、九八八圓

であつて、給與の狀況は常備組頭七十三圓、小頭六十七圓、消防手四十九圓より五十六圓まで

である。又非常出動の場合は常備員一圓豫備員一圓五十錢と定められてゐる。

尚主要機械の内容を示せば左の如くである。

名 稱	幅長	馬力	放水量	購年 月入	價 格
唧筒自動車	長十七尺 幅五尺七寸	二二	七五	大正七年十二月	三、二五〇圓
蒸汽唧筒	長十尺 幅五尺	一六	二五	大正十年三月	五、〇〇〇圓
腕用唧筒	一號	二箇			
ホ ー ス	三十本(三吋五十尺物)				

第十六 兵 事

三四二

在郷軍人會今宮分會

帝國在郷軍人會今宮町分會は、明治四十五年四月に創設せられた。當時は會員數も五十名内外で従つて役員も亦數名を出でない誠に微々たる一分會として呱呱の聲を擧げたのであるが、創立後僅々十四年なるに、今日では名譽會員百餘名、會員數二千三百六十名を算し役員も又五十九名を有するの盛況を呈するに至つた。此の十四年間數代の分會長を経て當町が短年月の間に急激な發展と共に本邦第一の大町と化したに正比例して、當分會も異常な急速力で擴大せられ、鞏固な基礎の上に強大な勢力を有する異數の團體が構成せられた事は、殆んど他に其類例を見ないのである。此の無比の發展振りを示した我國有數の本分會も終に西成郡が大阪市域編入の爲めに併合せられたのである。茲に聊か過去現在の概況を略述しよう。

一、現在の組織

大正十一年十月秋期總會で豫備陸軍一等軍醫吉田繁治郎氏が分會長に就任すると同時に副長二名で分會長を補佐し、幹事長一名幹事六名理事三名會計一名で共に内務の處理に當り其他に

班長十三名組長三十三名で班及組の處理に任じた。分會を十三ヶ班二十六組制度として一ヶ班に約二百名内外の會員を抱有するの組織である、尙財政の方は基本金壹千五百圓を有し町よりは毎年補助金年額金參百圓を受けて年中行事の諸費用に充ててゐる（因に本分會正會員からは會費を徴收しない定めである）

二、現行の事業

事業は之を二分して年中既定事業と豫定事業の二部制度としてある。

既定行事

入隊除隊兵の送迎、現役軍人の慰問、三大節拜賀式舉行、壯丁及點呼の豫習、招魂祭及春秋總會、耐熱及耐寒行軍、記念日祝典。

豫定行事

通俗及軍事講演會、壯丁豫備檢診及徴兵検査立會、春秋武術競技會、及一般運動競技會支部及聯合競技參加、夏期及冬期會員訪問、分會報發行。

右の外火災其他天災地變の突發的事變に際しては會員出動して機宜の措置に任じ又名譽會員及一般會員の慶弔には代表者が訪問するの定めである。